

## 社会認識論における Gap Argument の検討

加納寛之 (Hiroyuki KANO)

大阪大学大学院 人間科学研究科 博士前期課程

---

Gap Argument とは、証拠と仮説の間を埋める論拠のことを指す。科学哲学の中心的なテーマのひとつに、証拠や観察によって理論を一意的に決めることはできないといった決定不全性の議論がある。Gap Argument は決定不全性の問題に端を発し、証拠と仮説の関係性に着目する。社会認識論の中には、その間を埋めるために、社会的・文化的価値などの科学活動に外的な価値(非認知的価値)を媒介とすることで、推論を促進させることができるとする議論がある。

このように、科学活動の中で社会的要因の役割を強調することは、科学の客観性の否定や、科学的合理性は社会的合理性の一部でしかないような印象を与えるかもしれない。しかし、Helen E. Longino は、科学の成される社会的・文化的環境に属する個人的・社会的・文化的価値が科学の客観性を保つうえで積極的な役割を果たすと論じている。それに対し、Philip Kitcher は、彼女の議論が相対主義的な傾向を持つと批判している。Gap Argument をめぐって今日に至るまで議論は続いているが、社会的要因が科学推論にどの程度、どのように関わるのかに関して決定的な指摘はまだ成されていない。

本発表では、まず、非認知的価値を媒介とした科学的推論がいかなる意味で客観性を保持するのか議論する。その中で、非認知的価値と因果性・実在性の関係を検討する。そして、それを受け、科学推論における非認知的価値の役割を提示したい。